

瀬戸内に建つ、400年の歴史

寺とも
かわら版



徳成寺
とく じょう じ

第226号 2025年10月 発行責任者／住職・大山健児 坊守・大山ひとみ

お坊さんの処方箋・極楽／極楽

いつもありがとうございます。住職の大山です。この度、ご縁があり香川尊厳死協会にお招き頂き、講演させて頂くことになりました。

テーマは、「死の受容について」です。「死の受容」は、アメリカの精神科医エリザベス・キューブラー・ロスさんが著書「死ぬ瞬間」で提唱した「死の受容過程」で、最後の五番目に取り上げた「死を自然なものとして受け入れ、心穏やかに過ごせる状態」のことです。

これを知って、私達が日常使っている「極楽」という言葉に重なるて聞こえました。「極楽・極楽」と言うのと、温泉につかっている気分になると思わず口をついて出る言葉ですが、その心穏やかな瞬間は、もう少し深く掘り下げてみれば、死を自然なものとして受け入れて、心穏やかに過ごせる究極の楽しみへと深まります。

古来不老長寿を人類は求めて参りましたが、どうしてみても叶わぬ夢のようです。そこで仏教のおススメが極楽です。しかもこの極楽は従来

の死後に往くところではございません。むしろ現在ただ今、目を覚まさないという意味がありません。

人間は揺れる

大山超世の耳を澄ませば

お世話になります、副住職です。お

彼岸参りでお世話になったご門徒の皆様ありがとうございます。先月7日に秋の法要が厳修され、その際に小笠原望先生の講演を聴講致しました。1

番心に残ったお話が「人間は揺れるから面白い」と言う言葉でした。先生は3年に1回くらいのペースでナーバスになるそうで、日記に「今世紀で1番調子が悪い」と書いて3年前の同じ時期の日記を見返すと、全く同じ事が書かれてあるという事をお話いただきました。エピソード自体も面白いのですが、

先生のような穏やかな人であっても気持ち落ち込んだり、不安に苛まれるという所が興味深い所でありました。講演の前段では永代経法要が務まり、

死を自然なものとして受け入れるとは、生を自然なこととして受け入れる事です。つまり一切の計らいを超えしめられるのです。それがお念仏して極楽往生する事なのです。

「仏説阿弥陀經」が読誦されました。飢えや争いや悲しみのない浄土の様子について説かれているお経です。私の仏教の先生はこのお経を解説された時に「不安を抱えて無い人間はいないから、理想の世界が願われるんだ」とお話をされました。医療と仏教という事で違う分野の方ですが、どちらも人間は揺れ動く生き物であることを言い当てていて、深く

領いたお話を頂きました。私も気持ちが揺らいだ時は是非過去を訪ねてみたいと感じました。



小笠原先生
ありがとうございました